

家庭科教育

他者とのかわりの中で

学びを深め、技能を育てる

内藤 しをり

一 はじめに

分科会の冒頭に、共同研究者の増渕哲子氏（北海道教育大学札幌校）から、教育をとりまく状況についての報告と基調提案がなされた。

『自民党参議院選挙公約二〇一三』には、「さあ、教育を取り戻そう。」とわが国を愛する心を養う教育を推進するという文章が盛り込まれている。不適切な性教育やジェンダーフリー教育、自虐史観偏向教育等を行わせません、規範意識を養うために高校において新科目「公共」を設置する、教育基本法・学習指導要領に適った教科書の作成・採択などの文言が書かれ、国が教育を押し進めようとしている現状が伺われる。

各業者の教科書を比較してみると、子どもの貧困は国外の

問題であると記載している教科書、社会保険に基づく諸制度の給付を受けるには、社会保険料を納めていることが原則であり、納めていない場合は給付を受けることができない。社会保険を充実させるためには、利用者である国民がより多くの保険料や税金を負担することが必要になるといった自己責任ともとれるような記載のある教科書もある。教科書によって、貧困や社会保障などの記述が異なるなど、家庭科の学ぶ内容に変化があらわれてきている状況を再認識した。

家庭科をとりまく状況は厳しいが、昨年は、子どもたちが自らからだを使つて働きかけ、何らかの学びを得ることを望んでいる様子が確認されている。子どもたちの生活の現状をとらえ、子どもが主体となる学びを家庭科でどうつくるか、考えていきたいと基調提案がなされた。

二 実践報告

1 「家族とのつながりを大切に

〜家庭科の実践を通して〜パート2」

北見西小学校 大坪 哲也

年々、子どもたちの手や指は動かなくなってきている。ゲームで使う指はとても器用なのだが、ひもが結べない、針の穴

に糸を通せない、定規を使ってもまっすぐに線が引けないなど驚くことだらけである。「玉結び・玉止め」の学習では、「先生、針の穴が通りません。」と悲しそうな顔をする子が多い。

大坪実践からは、子どもたちの家庭科の実習での実態が報告された。

そこでたっぷりと時間をかけて学習する。ビデオを見てポイントをしっかり覚える。班ごとに教えあつて確実にできるようになるまで練習する。5分間で何個の玉結びができるか競いあう。そしてボタンつけの学習の後に、フェルト3枚を重ねて花びらをつくり、家族の中で一番あげたい人にプレゼントをするという実践。

社会全体の人間関係が希薄になってきていて、この希薄な人間関係が家族内にも押し寄せ、そういう中で育った子どもたちが人間関係を上手につくれず、学校内で様々なトラブルを起こす原因になっていることに心を痛め、少しでも人との関わりを深めるきっかけになればという思いで取り組んでいる。プレゼントをもらった家族に書いてもらったコメントは、家族のコメント紹介としてまとめられ、他の家ではどのようなコメントが書かれたのかを見ることで、他の保護者の思いも感じてもらえる。家庭科を通して、子どもたちが、少しでも家族のつながりを実感できるようにしていきたいという思いが込められた実践である。

2 「技能獲得の楽しさを」

せたな町立大成中学校 日下 恵子

地域で行われている技術・家庭科サークル活動5年間の報告である。キノコ狩りをしたキノコを使った調理と春に採取保存していたギョウジャニンニクを使った餃子づくり、漁業関連施設見学と地域の食卓に必ず上がっているゴツゴ（ホテイウオ）調理、町内で飼育されている羊の毛を洗毛しカーテイング・糸紡ぎ、羊毛工房での加工・製作体験、天然染料を使った染色体験など、授業研究と教師自らの経験を広げるための学習として位置づけて、外に活動を広げながら進めてきたサークル活動である。

体験を通じた学びにより、技能を獲得することの楽しさを教師が実感し、その感動を持って教室の子どもたちと向き合うことで、子どもたちも技能獲得の楽しさを感じ、技能を生かし、高めてこうとする意欲を育てていくことができる。

現在勤務する地域は海のそばにあり、「海の地域を生かした学習をしたい」と考えた。昨年は「大成の漁業」について講話を受けた後に実習に入っている。地場産業の漁業を知り、そこで獲れたものがどのように加工・利用されているのかを学ばせたい。自然に向き合い、それをどう自分の中に取り込んで工夫

しながら生かしていくかが技能獲得のベースにある。自然から調達し、技能を使って生活していく力は、災害時に生命を維持する能力にもつながるのではないか。技能の値打ちを生活の中にしつかりと位置づけたい。そして教師自身が生活技能に対する興味関心を持ち続け、単なる伝承に留まらずに未来に発展させていく形を、教師集団研修の場で探っていきたいと結んでいく。

3 「地域の人々と作る授業3」

北海道滝川西高等学校 福岡 あゆみ

地域の農家、栄養士、滝川おもしろ塾の方々と授業を行っての3回目の選択「食物」の実践報告である。作物の植え付けから、草取り、収穫、調理までの実体験で、生徒は「落花生は土の下にできることを初めて知りました。」「想像することができなかったことがわかった。」「一緒に作業をしている農家の方々から聞く話が新鮮で頭にすごく残っている。」と感想を述べている。3年間続く地域の人たちとのつながりは、生徒とのコミュニケーションを深め、年々いい授業になっていく。

また、生徒は実習絵日記に「雨が全く降っていないく、畑への水不足が心配だった。昨年あたりから、雨が全く降らないときと、降ると大雨のような天気になることが気になっていた。」

と作物と気候との関係を気にかける。農業をとおして自然環境が見えてくる。教師自身も毎年新たな発見があり、農家の方から直接話を伺うことや実際に体験することの大切さを実感している。

4 「学校設定科目『生活教養』で自分を耕す②」

北海道札幌白陵高等学校 伊槻 久美子

単位制高校の選択科目の実践報告。サービスマテック検定、浴衣の着付け講座、電話の応対実習、残暑見舞いを書く、茶道を体験する、俳句を詠むなどの内容が盛り込まれている。題材ごとに生徒の変化がみられる。電話応対では、はじめは声も小さく照れながらであったが、だんだんと要領を得てできるようになっていった。練習前と後とでは、明らかに雰囲気の変化し、別人のような対応になっていった。特に茶道体験の「座る、立つ、歩く」の授業を受けて、背筋を伸ばして歩けるように変身していった。やればできるようになることを自分で経験して気づき、見違えるような立ち振る舞いができるようになったことに生徒自身が驚いている。また、手紙の書き方を学ぶだけで終わらず、浴衣の着付け講座の講師の方に札状を書いたら返信が届いた。担任に残暑見舞いを出したら返信がきたなど、交流が生まれる授業である。切り取って教えるのではなく、意味ある活動の中

で技術を習得する実践である。茶道体験では、まとめとして先生方を招いてお茶会を開く。各生徒が役割を分担し、シーンとして緊張感漂う中、全員で協力し精一杯のおもてなしをした。退席するA.L.Tの先生から「Good job.」と声をかけられやつと笑顔がでた。茶会を通して人と呼吸を合わせることが学ぶことができた。「交流が生まれる授業」であり、教室から発信し、教室の外の人たちと交流をつくることができた授業であった。授業者も生徒とともに楽しんできたのかもしれないと述べている。

5 『新カリ』ってどうなのかな?」

北海道雄武高等学校 岩佐 美和子

新学習指導要領による学習指導が開始された。「生きる力」を理念として打ち出し、家庭や社会の協力などを盛り込んだ新学習指導要領は一見すると充実した内容であるように見える。しかし、本来、生活の中で自然に培われていた様々な能力が欠けていった背景を見ずに、現在の子ども達に欠けている力を補うためにこのような教育をしますという考え方には違和感を覚える。従来、生活の営みの中で培われた様々な力を、家庭科教育で様々な経験をとおして養っていききたいという思いでまとめられたレポートある。

十年ぶりに担任をもち、生徒の状況に驚く。隣にいるのにメールで会話、実習時にわからないことがあると、周りのことを考えないで先生に質問する、叱られたくない失敗したくないのでいちいち確認する、みんながやらなから自分もやらない、みんながやっているから自分もやる、いい意味でも悪い意味でも先生の言うことには従うなどの状況が見られる。

だが、生徒は文章で表現するのは比較的得意であり、「変わりたい」「頑張りたい」「人のためになりたい」という思いを持っている。

経験していないことが自信のなさにつながっている生徒たちに、様々な経験をとおして成長させたいと、学校や学年では、ピア・サポート学習を取り入れる、褒めるための要素として「作文」「感想文」を書かせる、町内の職場見学や小学生・専門学校生との交流などの体験をする、声かけや面談をとおして「見ているよ」「気にかけているよ」とアピールするなどの取り組みをしている。

家庭科では、「人生」について考える、グループ学習でリーダーを育成し学び合う喜びを体験させる、実習など体験的な活動を数多く取り入れる、様々な力が必要とされる調理実習を大切にする、レポート提出で終わらずレポート発表へなど、ピア・サポートの手法を取り入れて、話し合いのできる、失敗してもいいのだと思えるような環境をつくるようにしている。

カリキュラムが変わっても、家庭科で教えたいこと伝えたいことは変わらない。家庭科の授業でできることを大切に、生徒達のもつ課題を一つでも解決し、他者との関わりを大切にしながら幸せに生きてゆく力をつけさせたい。生徒を成長させていきたいとまとめている。

二 二 まとめにかえて

家庭科は、他者との関わりの中で学びや技能の習得ができる魅力ある教科であることが再認識できた。だが、高校で「公共」が科目として設定されると家庭科は2単位で十分となるとか、道徳的なものを取り込まれてくる恐れがある。道徳につながる心情的な家庭科にならないようにしなければならない。

また、技能の習得だけに偏らず、社会や自然を認識しながら、人や生活の中で役立つ技能を経験値として身につけていくことが求められるなどの課題もある。看護学生に実習服の裾上げを自分でするように課すと縫えない、きちんとしぼれていないタオルで拭こうとするなど、職業人としての技能ととらえる、と、しっかりと身につけさせないといけない。

子どもたちは「忙しさ」からか、今まで身につけてきたことを身につけてこないで学校に入学してくる。だが、できていなければ、その時（必要な時）にできるように行えばよいので

はないかという意見があった。「ハイハイ」している子どもに「走れ」はおかしい。次に立たせることであるように、子どもの発達をみて、今どのところにあるのかを見極めて対応することが大切なのである。

教科書検定が通るような教科書が作成されるなど、家庭科を取り巻く状況は厳しい。しかし、家庭科の学びは社会力につながる。よりよい社会をつくる力を育むことのできる家庭科の学びを、さらに実践とおして検証していきたい。

（小清水高校）